＜授業実践５＞「言語文化」書くこと

１　単元名

伝統行事や風物詩などの文化に関する題材を選んで、随筆を書こう

２　指導目標

(1) 単元の目標

・古典の世界に親しむために、作品や文章の歴史的・文化的背景などを理解することができる。(〔知識及び技能〕(2) イ)

・自分の知識や体験の中から適切な題材を決め、集めた材料のよさや味わいを吟味して、表現したいことを明確にすることができる。(〔思考力、判断力、表現力等〕Ａ「書くこと」(1) ア)

・言葉がもつ価値への認識を深めるとともに、生涯にわたって読書に親しみ自己を向上させ、我が国の言語文化の担い手としての自覚をもち、言葉を通して他者や社会に関わろうとする。(「学びに向かう力、人間性等」)

(2) 言語活動

ア　言語活動

「日本における鬼の文化」をテーマに随筆を書く。

イ　言語活動のねらい

地域における祭りなどの伝統行事や伝承されてきた昔話など、文化に関する題材を設定し、自分の感じたことや考えたことなどを、自分との関わりを踏まえながら書かせたい。

(3) 教材

ア　教材

『伊勢物語』「芥川」(『言語文化』数研出版)

イ　教材観

女性を失ってしまった男の心情を読み取り、展開のおもしろさを味わえる。そして「白玉か」の和歌が果たしている役割を確認し、「歌物語」の特徴を学ぶこともできる。内容を理解した上で現実と虚構の入り混じった物語であることに触れ、平安王朝の人々にとって「鬼」とはどのような存在か、また現代でも伝統行事や昔話に登場する「鬼」が象徴するものは何かについて、生徒それぞれが「鬼」を身近な存在として捉えるのに適した教材である。

(4) 学習者観

感想や意見を述べるという経験は授業の中でも多くあり、感想記録やコメントとして記入させてきた。また、調べ学習も教科に限らず慣れているようで、スムーズに取り組むことができる。しかし、多くの生徒は調べた事実をそのまま記録したり発表したりするという程度にとどまっている。さまざまな資料と自分との関わりを見つけ、まとまった量の文章として随筆を書くことは、高校入学後初の試みとなる。

(5) 主体的・対話的で深い学びの工夫

古典籍に直接触れたり、図書室やインターネットを活用したりするなど、参考となる資料を幾つか提示し、生徒が興味をもって取り組めるよう工夫した（主体的)。

伝統行事や伝承される昔話についてグループで話し合う機会を設け、題材にする「鬼」と自分との

関わりがもてるよう工夫した（対話的）。

随筆として書くにあたり、ワークシートを活用することで自分の知識や体験の中から、感じたり考えたりしたことを深められるよう設定した（深い学び）。

３　観点別学習状況の評価

（1）単元の具体的な評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
古典の世界に親しむために、作品や文章の歴史的・文化的背景などを理解している。	「書くこと」において、自分の知識や体験の中から適切な題材を決め、集めた材料のよさや味わいを吟味して、表現したいことを明確にしている。	随筆を書くことを通して、自分の体験や思いが効果的に伝わるよう、文体、描写、語句の表現の仕方を粘り強く工夫する中で、自らの学習を調整しようとしている。

（2）評価方法

ア　知識・技能

ワークシートの記述によって評価する。

イ　思考・判断・表現（書くこと）

ワークシートと随筆の記述によって評価する。

	評価Ａ	評価Ｂ	評価Ｃ
「鬼」についての文化を調べ、自分が感じたことや考えたことなどを踏まえ、随筆を書いている。	「鬼」についての文化を調べ、自分が感じたことや考えたことなど、自分との関わりを踏まえながら、独自の視点や深い考察などを通して工夫して随筆を書いている。	「鬼」についての文化を調べ、自分が感じたことや考えたことなど、自分との関わりを踏まえながら、表現したいことを明確にして随筆を書いている。	「鬼」についての伝統行事や信仰などの文化について、調べたことを書いている。

４　単元の指導計画（配当６時間）

次／時間	学習活動	言語活動における指導上の留意点 ＊生徒への支援の手立て	評価上の留意点 ◇観点　□点検・確認■分析 ＊「努力を要する状況」と評価した生徒への支援の手だて

第1次（2時間）	・単元の目標や進め方を確認し、学習の見通しをもつ。 ・『伊勢物語』という教材について理解する。 ・ペアで音読した後、地の文を現代語訳し、内容を確認する。 ・男の心情を考える。 ・和歌を解釈し、地の文と和歌の関係性を考える。	・教材の歴史的価値や文化的背景に興味をもてるよう、「鬼」について生徒間で情報の共有を促す。 ・「歌物語」の特徴を学び、在原業平との関係性について理解させる。 ・予習プリントを活用し、重要語句について確認し、現代語訳させる。 ＊文法に留意し、主語を確認しながら現代語訳させる。 ・「男」の行動と心情についてワークシートⅠを使ってまとめさせる。 ・和歌の内容をつかませるとともに、男の心情を理解させる。 ＊地の文は男が和歌を詠むに至った経緯を語っていることを理解させる。	◇（知） □「記述の点検」（ノート、ロイロノート・スクール(株式会社 LoiLo、以下ロイロノートと表記） ◇（知） □「記述の確認」（ノート） ＊文脈に沿った意味で語句が理解できているか、教科書の語注も参考にさせる。 ◇（知） □「記述の確認」（ワークシートⅠ） ＊「男」が主語となる文を確認させる。ペアで相談しながら、ワークシートⅠを完成させる。 ＊ペアで話し合い、男の嘆きを想像させる。
第2次（1時間）	・第２段落を音読し、あらすじを捉えた後、丁寧に読解する。 ・第１段落と第２段落の関係性について理解する。 ・現実と虚構の部分を比較し、「鬼」の存在について考える。	・正確に読めているかどうかを確認する。 ＊敬語表現に留意させる。 ・二条の后を取り巻く人間関係を捉えさせる。 ＊「男」が在原業平として書かれていることを確認させる。 ・「鬼」が意味するものは何かを現実と比較しながらワークシートⅡをまとめさせる。 ＊当時「鬼」とはどのような存在だったかを想像させる。	◇（知） □「記述の確認」（ノート） ＊業平の系図や歴史的事件などを紹介し、理解の手助けとする。 ◇（思） □「記述の確認」（ワークシートⅡ）

第3次（3時間）	・関係する古典教材や資料、インターネットを活用し、「鬼」の文化を調べる。 ・文化としての「鬼」について自分が感じたことや考えたことなどを随筆として書く。	・グループで調べたり、話し合ったりする中で、知識や体験を他者と共有させる。 ＊生徒の興味を引き出すような資料を紹介する。 ・鬼にまつわる身近なエピソードや調べて気付いたことを基にして、随筆で表現したいことを考えさせる。 ＊調べ得た情報だけでなく、自分が感じたことや考えたことを書くよう留意させる。 ＊完成した者は、自分が感じたことや考えたことが伝わる文章かどうかを確認させる。	◇（態） □「行動の観察」 ◇（思） ■「記述の分析」（ワークシートⅢ） ■「記述の分析」（随筆） ＊題材から思い付くことを連想させ、自分の知識や経験が結び付くよう助言する。

5　本時の指導計画

(1) 本時の具体的な目標

「鬼」についての伝統行事や信仰などの文化を調べ、自分が感じたことや考えたことなどを踏まえ、随筆を書くことができる。

(2) 本時の具体的な評価規準

「鬼」にまつわる伝統行事や信仰などについて、自分が感じたことや考えたことなどを、自分との関わりを踏まえて書いている。

(3) 本時（５時／６時間）の指導計画

学習段階	学習内容	学習活動	言語活動における指導上の留意点
導入（5分）	・本時の学習内容を知る。	①単元の目標と言語活動について確認する。	①「鬼」の文化について、自分が感じたことや考えたことを随筆として書くことを理解させる。
展開（40分）	・「鬼」について調べ、得た知識を基にしながら、自分が感じたことや考えたことなどを随筆として書く。	②「日本における鬼の文化」という視点で書くことを確認する。 ③調べたことにとどまらず、自分の感じたことや考えたことなどを整理し、まとめる。	②ワークシートⅡを活用し、「鬼」の文化が現在にも根付いていることを理解させる。 ③調べて得られた知識だけではなく、そこから感じたことや考えたことを随筆で表現するよう注意する。

		④随筆で自分が表現したいことを明確し、自分との関わりを踏まえて書くように心がける。 ⑤必要に応じてペアで読み合い、自分が伝えたいことが書かれているか確認する。	④ワークシートⅢを活用し、随筆で自分が表現したいことを確認させる。 ⑤他者の助言を踏まえ、自分の伝えたいことが表現されているか確認させる。
終結（５分）	・本時の内容を振り返る。 ・次時の内容を知る。	⑥振り返りシートを入力する。	⑥本時の目標に即した活動ができたか、またその達成度について、振り返ってロイロノートに入力させる。 ■ワークシートⅢを回収し、ルーブリックを用いて「記述の分析」により評価する。

６　研究の実際と考察

(1) 第１次・第２次における指導

第１段落の内容を踏まえた後､「鬼」が得体の知れない恐ろしい怪物のような存在として描かれていることを確認した。第２段落で史実の部分を読んだ後に、そのような「鬼」に「女」が食われてしまったことで、どうすることもできなかった「男」の悲嘆や悔恨、喪失感が効果的に表現されていることも生徒たちの間で共有できた。平安時代の人々にとって畏怖の怪物、畏敬の象徴であった「鬼」が、現代の日本文化の中にも根強く息づいていることに気付かせ、興味をもって調べるきっかけになることを目指した。フィクションとして「鬼」を描いたことにより、男の心情がより鮮明に浮かび上がる効果があったことを理解させたいというねらいがあった。

随筆を書くにあたって、ワークシートで「鬼」についてのイメージマップを作成した。生徒間で幼児期の遊びや昔話、伝統行事などから「鬼」を見つけるよう促すと、身近に捉えることができたようで会話が弾んでいた。ワークシートにある「節分」の他､「鬼ごっこ」「桃太郎」「鬼まんじゅう」「鬼滅の刃」「鬼瓦」「鬼嫁」等々、広く鬼に関する言葉が書き出された。また、これまでに描かれた鬼についての資料も紹介し、「鬼」がもつイメージ「怖い」「恐ろしい」「強い」「大きい」などグループで共有させながら、それぞれが自分の経験に照らし合わせ随筆を書くように指示した。

(2) 評価について

完成した随筆を〔思考力、判断力、表現力等〕の「書くこと」の評価対象とした。文体には拘らず、「自分が感じたことや考えたことなど、自分との関わりを踏まえて」書けているかどうかを基準とした。この基準により、新たに得た知識に対する驚きや、考えが深められた感想などの分かる記述があればＢ評価とした。また、この基準を基に、明確に自分の主張が述べられているもの、独自の考えを分かりやすく表現できているものをＡ評価、調べて分かった知識の紹介のみに終始してしまったものをＣ評価とした。

７　研究の成果と課題

「鬼」は平安時代の人々にとって単なる怪物としてだけではなく、災害や飢饉、疫病などの悪の象徴であり、人の力が及ばない狂暴怪異なものとして認識されていた。現代社会においても「鬼」は身近な化け物として日本人の心に棲みついており、文化として生き続けていることを生徒たちにも改めて見つめ直してほしいと考えた。『伊勢物語』「芥川」は、「鬼」に触れ、文化として見つめ直すきっかけとして十分に効果的な教材であった。

今回、随筆という形で文体に縛られることなく自由に表現してもらおうと考えたのだが、評論の要約でもなく、感想文でもない随筆は、生徒たちの中で戸惑いがあったようだ。提出された作品の中には、調べ学習の結果をプレゼンテーションする際の発表原稿のような形式のものが一定数あり、型にはまった文章になってしまっていた。実践では、ワークシートⅡを経て、そのまま随筆の執筆活動に取り組ませてしまったため、自分の表現したいことがはっきりしないまま書き始める生徒もいた。上記のような反省から、第３次の指導計画を見直しワークシートⅢを追補した。新たに加えたワークシートⅢでは、「鬼」について調べたことを基に自分の思いや考えが随筆として表現できるよう「鬼にまつわるエピソード」「新たな気付きや考え」「表現したいこと」の３項目を記入するものとなっている。第３次の学習活動でこのワークシートⅢを活用し、三段落構成で随筆を書く準備ができるだろう。また、各項目にチェック欄を設け、単元の目標を意識させる工夫もした。ワークシートⅢを活用すれば、生徒自身が表現したいことを明確にした上で随筆を書くことになり、調べ学習からそのまま書き始めるより、スムーズに随筆の作成につながるのではないだろうか。今回指導した生徒たちには、自分との関わりを踏まえて、自らの考えや思いを明確にして表現できる力を今後の授業で養っていきたい。

また、単元の目標を〔思考力、判断力、表現力等〕Ａ「書くこと」（１）アに設定したが、イ「自分の体験や思いが効果的に伝わるよう、文章の種類、構成、展開や、文体、描写、語句などの表現の仕方を工夫すること」に設定することもできる。生徒の実情に応じて変更したり、段階を踏んで他の教材で目指したりすることも可能だろう。

〔生徒感想〕

・鬼について、存在は知っていましたが、生まれた訳や存在意義など根本について知ろうとも考えてもいませんでした。この機会に日本の鬼について知れてよかったです。

・現代でも節分のような鬼を悪とするものが多いように縁起の悪い物というイメージが強かった。

・自分の知らなかった鬼の文化を知るきっかけになって書いていて面白かった。

・今回の随筆はもともと何かを題材に文を書くことが好きだったからか楽しく取り組むことができた。

・「好きこそものの上手なれ」という言葉があるように楽しかった記憶や好きな事柄は脳に残りやすいと思うので機会があればまた何か今回みたいな文を書く機会があるとうれしいです。

【参考】

・国立国会図書館デジタルコレクション（ndl.go.jp）
　（鳥山石燕『図絵百鬼夜行』、暁斎『百鬼画談』など）

・データベース国際日本文化研究センター（日文研）（nichibun.ac.jp）
　（怪異妖怪関係資料）

・日本の鬼の交流博物館（fukuchiyama.lg.jp）
　（鬼とは何者か？）